

## 博士論文要旨

学籍番号 08D010  
氏名 富安 眞理  
研究指導教員 川村 佐和子 教授

### 論文題目

高齢パーキンソン病療養者の摂食・嚥下障がい支援を行う家族介護者の生活課題に関する研究

## I. 研究の背景

平成 18 年以降、医療制度改革の推進に伴い、入院は急性期の短期間に限られ、医療を必要としながら在宅療養生活を送る高齢者が増えている。療養者に医療的管理を必要とする状態になると、多くの家族介護者は在宅での生活困難に遭遇し、在宅療養継続はいつそう困難になることが報告されている。高齢者に多いパーキンソン病療養者のQOLに関する研究は、近年行われるようになってきているが、家族の介護や生活の課題については、研究が少ない現状である。そこで、医療ニーズをもつ高齢者として、神経難病であるパーキンソン病療養者を選定し、介護者である家族を研究対象者とした。

## II. 研究目的

本研究においては、高齢パーキンソン病療養者の摂食・嚥下障がい支援を行っている家族介護者の生活実態を調査し、生活課題を探求する。

## III. 研究方法

### 1. 研究デザイン

研究デザインとして質的記述的研究法を用いた。その理由は、高齢パーキンソン病療養者の摂食・嚥下障がい支援を行っている家族介護者の生活実態を調査することにより、家族介護者自身の健全な生活の遂行過程において、生活の中に生じる生活課題を探求することを目的としたためである。

### 2. 調査方法

#### 1) 研究対象者

摂食・嚥下障がいがあるが、経口によって食事摂取ができる自宅療養中のパーキンソン病高齢者(ヤールⅢ以上、60歳以上)の家族介護者で、同意を得られた者とした。

#### 2) データ収集および分析方法

##### (1) 面接調査

面接内容は、録音の同意が得られた場合には、ICレコーダーに録音し、逐語録とした。逐語録を作成後、介護実態および摂食・嚥下障がい支援に関して、意味ある文節に分け分類整理し、カテゴリー化した。分析過程における厳密性の検討には、4つの基準(Lincoln & Guba, 1985)を用いた。

##### (2) 質問紙調査

得られたデータを分析する上で、高齢パーキンソン病療養者・家族介護者基礎情報が必要となる。なお、家族介護者基礎情報には、介護者の負担感を測定するJ-ZBI\_8（荒井由美子他、2003）、家族介護者の健康関連 QOLを測定するSF-36v2（福原俊一他、2005）の尺度項目を取り入れ、その得点について、記述統計的に分析を行った。

### (3) 昼食支援時間調査

観察記録票を用いて、家族介護者が行っている昼食に関する支援の開始・終了時間について、観察・記録を行った。面接調査結果から作成した摂食・嚥下障がい支援分類用いて、家族が行った昼食支援時間を分類整理し、パターンの共通性を検討した。

## IV. 結果及び考察

### 1. 対象者の概要

家族介護者は、男性5名、女性10名であり、平均年齢64.4±11.2歳（範囲38歳～81歳）、平均介護年数は9.0±5.57年であった。データ収集期間は2010年3月から5月であった。高齢パーキンソン病療養者は、男性10名、女性5名であり、平均年齢68.9±6.2歳（範囲61歳～80歳）、であった。

### 2. 家族介護者の生活実態と生活課題

質問紙調査であるZarit介護負担尺度短縮版の平均得点は、13.73±4.16点であった。また、SF-36v2の下位尺度平均得点について、2007年国民標準値(60代)の値と比較すると、身体機能45.8点、全体的健康感48.2点は、ほぼ同様の結果を示した。しかしながら、日常役割機能(身体)や36.4点、活力42.1点、心の健康41.8点は、低い値を示した。昼食支援時間調査における、昼食支援時間は、157.7±45.2分であり、昼食摂取時間は、25.3±17.0分であった。家族介護者による摂食・嚥下障がい支援の特徴は、各項目に所要時間がかかり、時間の範囲が広く療養者の個別性がケアに反映され、家族介護者の負担増加の実態が示された。面接調査のデータ分析から、高齢パーキンソン病療養者の健康問題は、7領域に分類・整理された。また、家族介護者による摂食・嚥下障がい支援は、【食事を安全に支援する】【環境を整備する】【摂食への負の影響要因を考慮して支援する】の3領域に分類された。家族介護者の生活課題は、【在宅ケアの全責任を感じつつ在宅療養を支える】【薬効のある時間帯に生活行動を支える】【健康・経済的に疲弊する】【家族喪失への予期悲嘆に直面する】の4領域に分類された。家族介護者のうち、13人(86%)が、60歳以上の高齢者であり、生涯発達モデル(Erikson、1951・1997)において、エリクソンは老年期に結実する最後の「強さ」として、「英知」を上げている。この英知とは、長い過去を振り返り、それによって自身の生活や自分の住む世界を理解する強さであるとされる。家族介護者は、【薬効のある時間帯に生活行動を支える】日々の中で、自身の【健康・経済的に疲弊する】ことや【家族喪失の予期悲嘆に直面する】という自身の生活を理解し、そこに住む自分の役割として、【在宅ケアの全責任を感じつつ在宅療養を支える】ことを受け入れ、実行する強さをもっていると推察した。

## V. 結論

家族介護者の生活課題4領域の関連性をモデル化した。生活課題に対応した訪問看護支援として、次の項目が示唆された。第1として、療養者の薬効ある時間を長期化し有効に活用することであり、摂食・嚥下障がいを軽減する助言や技術支援、摂食・嚥下の状態悪化への支援があげられる。第2として、家族介護者自身の介護負担を軽減し、QOL向上を図ることであり、家族介護者の休息への支援、QOL向上のための時間の確保への支援、がある。

## 博士論文審査の結果の要旨

学籍番号 08D010  
氏名 富安 眞理  
学位授与年月日 2011年3月14日

### 論文題目

高齢パーキンソン病療養者の摂食・嚥下障がい支援を行う家族介護者の生活課題に関する研究

論文審査担当者 委員長 藤本 栄子 教授  
委員 市江 和子 教授  
委員 濱松 加寸子 教授  
委員 渡邊 順子 教授  
委員 川村 佐和子 教授

本研究は、高齢パーキンソン病療養者の摂食・嚥下障がい支援を行っている家族介護者の生活実態を調査し、家族介護者自身の健全な生活の遂行過程で生じる生活課題を質的記述的研究法を用いて探究したものである。本研究は、予備調査をもとに、療養者が医療的管理を必要とする状態になると、多くの家族介護者は在宅での生活困難に遭遇するとの現状把握から、高齢パーキンソン病療養者が医療的管理を必要とする時期の家族介護者を研究対象として、QOLの観点から生活課題を探究している点が、新たな取り組みであり、今後の訪問看護の在り方を探求する研究として意義が大きい。

面接調査による質的データの分析に当たっては、厳密性の確保のための手続きを踏んで、摂食・嚥下障がい支援と高齢パーキンソン病療養者の健康問題のカテゴリーを抽出し、これらの質的分析結果に加え、質問紙調査と昼食支援時間調査の結果を傍証として用いながら、家族介護者の生活実態を具体的に提示している点が評価された。特に、昼食支援時間調査は、研究者が家族介護者の昼食支援状況を1分刻みで観察・記録し、客観的データで提示しており、高齢パーキンソン病療養者の摂食・嚥下障がい支援を行う家族介護者の生活実態を浮き彫りにすることに貢献しているとして評価された。食事や内服管理における個々の事例状況がややわかりにくいとの指摘はあったものの、研究協力の得難い摂食・嚥下障がいをもつ高齢パーキンソン病療養者の家族介護者を対象として、その生活の実態を明らかにし、さらに生活課題のカテゴリー領域を抽出し、その関係性をモデル化できたのは、研究者の研究に対する熱意と努力の結果であり、博士論文として十分な価値のあるものとして評価された。

今後も医療を必要としながら在宅療養生活を送る高齢者が増える中、本論文は家族介護者へのQOLの観点からの生活課題に対応した訪問看護の支援策を考える上で、多いに貢献できるものと評価された。

以上の結果から、審査委員会委員全員により、本論文が著者に博士（看護学）の学位を授与するに十分な価値あるものと認められた。